

いK式ですので、検査の経験が成人からスタートしたというのは、やはり異色なのではないかと思えます。

発達研究所研究員

2001年の再標準化作業が完了すると、後は特にK式との関わりはなく、他の多くの院生と同じく、修士論文執筆に迫られる大学院2年目を過ごしました。その間に、許可を得て実習形式でK式を練習させてもらったり（当時はまだ増補版でした）、乳幼児健診の手伝いをさせてもらったりして、少しずつ「発達」について関心も持ち始めていました。修士2回生で無事修士論文を提出できたものの、就職活動は思うようにいかず、卒業後はとりあえず非常勤の仕事を組み合わせて働く予定になっていました。

そんな折、松下先生から「京都国際社会福祉センターで仕事をしてみないか」とお声をかけて頂きました。センター内にある「発達研究所」はK式の研究・発行を担う部署ですが、その名誉所長に生澤雅夫先生にご就任頂き、私は研究員として実務を担当するという、私にとっては願ってもいないお話でした。3月半ばに面接があり無事採用して頂き、4月1日から勤務となりました。慌てて転居に向けて家探しや引っ越しの準備をしましたが、結局4月1日時点では家には冷蔵庫がなくガスさえ通っていないという状態で生活と仕事がスタートしました。

4月当初、仕事も手探りでした。というのも、生澤先生は体調を崩しておられたため、指示をもらわないと何をしたらいいかさえわからない状態であった私は、K式講習会の受講希望者のリストを整理するなど、

とりあえずできるところから手をつけている状態でした。

その翌月、生澤先生急逝の連絡がもたらされました。私自身も驚きましたが、これまで生澤先生が果たしてこられた役割の大きさを知る人ほどその衝撃は大きく、センターやK式研究会はショック状態に陥りました。K式講習会など最低限のものを除けば、K式に関する業務は一時的に機能停止してしまいました。当初考えていた生澤先生とトップにした「発達研究所構想」は成立しなくなり、当時新任であった私には、この先どうなっていくのか、何をしたらいいのかもわからず、途方に暮れるうちに1年目は終わっていきました。

新版K式発達検査講習会

それから10数年。暗中模索の繰り返しではありましたが、所内における唯一のK式研究部門の担当者として仕事をしてきました。最初に取り組むことになったのは、2002年に改訂したばかりの「新版K式発達検査2001」の講習会への対応でした。当時、検査の講習会は受講希望者が多く、受講希望から受講まで1年程度待つて頂く必要がありました。講習会の開催は当初年間3回でしたが、その後徐々に開催機会を増やし、年間5回になりました。しかし、一方で受講希望者もこの10年間で増加の一途をたどり、受講までの待ち時間は一向に短縮されませんでした。今年度からは、通常4日間の講習会の内容を少しアレンジして、3日間のコースを新設しました。3日間のコースと合わせて年間7回の講習を開催するようになり、ようやく待機期間の短縮に向けての目途がたったところです。

講習会の内容もこの10年で大きく変わりました。他の研修などでもそうですが、就職当時は液晶プロジェクターはまだあまり普及しておらず、講習会はレジュメとVHSビデオ、OHPなどを用いていました。新版K式発達検査2001には327個の検査項目があり、講習会ではそれぞれの項目の実施手順と評価基準を説明します。4日間かけてとは言え、内容的には膨大で、頭に入りきらないという感想も多く耳にすることがありました。そこで、まずパワーポイントで補助教材を作成し、その後は検査場面の講習用ビデオも用いるなど、視覚教材の充実を図りました。K式講習会以外でもそうですが、視覚的教材を用いた研修のニーズは年々高まるものがあり、研修を企画する中でも一定お応えしていかないといけない部分と理解しています。しかし、ある意味では研修への「わかりやすさ」への要望は尽きるところがなく、学ぶことに対するスタンスの変化も強く感じます。多くの研修が視覚教材を用いる中で、レジュメと講義だけで話引き込んでいくような先生に出会うと、強く感銘を受けたりもします。

改訂に向けて

2013年度から、2020年を目標とする改訂作業の準備に取り掛かりました。改訂作業の大変さの一端は、学生時代の手伝いレベルでも感じていましたので、職場にとっても自分にとっても一大事業になるという覚悟はありました。一番の懸案は、これまで検査作成の中心におられた生澤先生がおられないことでした。標準化作業には多くの統計的な処理が必要で、そのような作業をどう進めたらいいかは全く見当がついて

いない状態でした。

そんな状況に少し光が射してきたように感じたのは、生澤先生の過去の資料を整理していた時でした。生澤先生を知る方には有名なことですが、先生は資料の保管が極めて丁寧な方でした。印刷された紙資料はもちろん、手紙や、果ては手紙が入っていた封書までファイリングして保存され、ファイリングされた資料は背表紙と巻数をつけて順序良く整理されていました。資料の中には、1980年の改訂の時のものまであり、それらの資料がこれからの作業の大きな指針を与えてくれました。大学の授業でおっしゃっていた「論文は、後で同じ手順を取れば同じ結果が再現できるように書かれていないといけない」と言う言葉を思い出すような、非常に精密で正確な記録でした。

近年、発達障害への関心の高まりなどもあり、発達検査をはじめとする発達アセスメントへの社会の期待や要請にも変化が見られます。K式発達検査についても、単に前回の再現に留まらず、時代に合わせた修正や変化を検討していく必要があります。既に、いくつかの新しい検査項目を加えることなどが検討されていますが、その中で自分自身も少しずつアセスメントツールを作成することの面白さや難しさを肌で感じるようになってきました。

このような経過から、K式の改訂をテーマとして研究をまとめてみたいと考え、来春から仕事は続けながら、大学院に進学することにしました。ここまで、多くの方の影響を受けながら歩んでこられたことに感謝しつつ、責任ある仕事を全うしていこうと、心しているところです。